

熊本県の発生農場にかかる疫学調査チームの調査概要
(平成26年4月13日実施)

平成26年4月13日に実施した現地調査の結果、以下のことを確認した。

1 発生農場の周辺環境

- ① 発生農場は、山間部に位置し、農場周囲は、雑木林や竹林に囲まれている。敷地内及び敷地から約100m離れた場所に池があり、調査時には、水鳥は特に認められなかった。
- ② 発生農場は、5棟の鶏舎が並列で配置されており、発生鶏舎（第4鶏舎）は、入り口から4番目に位置している。

2 管理者及び従業員

- ① 鶏舎への出入りの際は、専用の作業着及び長靴への交換を行い、踏み込み消毒は実施していない。消石灰を踏み、鶏舎へ入る。消石灰の散布状況は、常に白い状態になるように維持していたとのこと。
- ② 発生農場は、原則として1名の従業員により管理されており、最近、海外への渡航歴はない。

3 鶏舎の飼養衛生管理

- ① 発生農場の飼料タンクは鶏舎ごとに1か所設けられ、タンク上部に蓋がされており、野鳥の接触や、糞の混入の可能性は低いと考えられた。
- ② 飲水は、上水が利用されており、いったん鶏舎ごとに500Lタンクに貯水され（鶏舎からは50m～100m程度離れた位置）、利用されている。
- ③ 飼料運搬車両が農場に出入りする際に、噴霧消毒は実施されていない（動力噴霧器は設置されているが、通常していないとのこと）。管理者によると、農場内の車両の通路にも消石灰を撒いているとのこと。
- ④ 鶏糞は、オールアウト数日後に、外部に委託し、関連農場付近の堆肥場に搬入する。

4 野鳥・獣害対策

- ① 発生農場付近では、たぬき、いのしし、さる、しか等が見られるとのこと。これら野生動物や犬の侵入を防ぐために、鶏舎周りには電気柵が設置されていた。
- ② 発生鶏舎は、壁面に金網（マス目は5cmと比較的大きい）が設置され、遮光カーテン及び防鳥ネットで覆うことによって、野鳥等の侵入防止を行っていた。金網には、複数箇所破損が認められた。また、防鳥ネット等の覆いにも隙間が認められた。
- ③ 鶏舎出入口には、前室はなく、金属製の引戸とネットの扉が設置されていたが、ネットの扉は閉めても上部に大きな隙間が認められ、ネット自体にも損傷が認められた。なお、気温上昇時は、換気のため、金属製の引き戸を開けるとのこと。
- ④ 鶏舎内で野鳥を見かけたことはないとのこと。
- ⑤ 発生鶏舎の側壁にはネズミ等が出入り可能な隙間が認められた。
- ⑥ ネズミ対策として、月に1回、鶏舎内に殺鼠剤を設置している。管理者によると、ネズミやその死骸を見かけることもあったとのこと。

5 死亡鶏の取扱い

- ① 死亡鶏は、輸送車の荷台に直接積載し、毎日、関連農場の近くにある、堆肥舎に搬入する。なお、堆肥舎は関連農場の敷地外にあり、道路に接していた。また、堆肥舎には数十羽のカラスが集まっており、猫も見られた。
- ② 指導員によると、通報前の死亡鶏の増加は、4月11日から認められたが、当初は暑熱によるものと疑い、鳥インフルエンザを疑うに至らなかった。